

## 共感覚者の意識と社会での在り方

堀江冬芽

共感覚とは字に色を感じる、音に形を感じるなど、ある種の知覚が起こった際に別の知覚を併発するという先天的な知覚を指す。共感覚者の感じている世界や体験については研究の只中にあり、明らかになっていないことも多い。主な研究は心理学的、医学的アプローチで共感覚の実態に迫っているが、本研究では共感覚者が生活送る上での体験を調査・分析し、当事者が感覚へ向けている意識、周囲への説明等の社会的体験に注目する。この目的を果たすことで、共感覚へ興味、不安、悩みを持つ当事者の一助になり得ること、より理解を進めること、共感覚の研究として今まで補足的、断片的だった生活体験を一部ながらまとめられることに意義があると考えている。

本研究は、半構造化インタビューの手法を用いて共感覚者が社会的にどのような体験をしているかを考察した。調査対象者は共感覚の当事者9名、研究者2名、研究する学生3名で、調査期間は2018年3月から同年9月である。

インタビュー調査とその分析を通じて得られたことは、共感覚を認識する様々な過程、調査対象者の共感覚関連情報の受発信・交流におけるSNS利用の実態、対外的・内省的な不安の詳細、感覚の不確かさについての当事者の意識等が挙げられる。今回、共感覚者の意識とその社会的在り方の一端が明らかになった。今後世間的には正しい認識、特に共感覚は多様性があるもので人それぞれに様々な感覚があること、また病気や天才的能力ではなく五感の個性の一つだという認識が広まることが望まれる。共感覚自体を認識した上で、それを持つ共感覚者の在り方も多様であるという意識が持たれば、共感覚者への誤解が避けられ、同時に共感覚者自身も感覚への不安が薄れること、また感覚への興味や可能性を追求することが期待できるのではないかと思う。

(指導教員 照山絢子)